

## 知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【開催日時】平成 25 年 10 月 16 日（水）

13 時 30 分～15 時 30 分

【会 場】なゆた・浜北 3 階大会議室

### 1 出席者

- ・ 発言者 浜松市浜北区において様々な分野で活躍されている方  
6 名（男性 3 名、女性 3 名）
- ・ 傍聴者 152 人

### 2 発言意見

	項 目	頁
発言者 1	吹奏楽団の活動報告と、音楽活動を通じた青少年の健全育成 市と県が協力した音楽のまちづくり	3
2	日曜診療の活動を通じた、子育てと保育所に関する問題提起	6
3	農業と食育活動 就農希望を阻む耕作放棄地の解消への要望	14
4	研究会の活動報告と、日本古来種の現状	16
5	スポーツ少年団の活動報告 こどものスポーツ振興	23
6	患者を思いやった病院機能の充実 障害者の就労支援	26

<県知事挨拶>

皆様こんにちは。県知事の川勝平太でございます。

台風26号、台風一過のきれいな秋空が広がっておりますけれども、皆様方のところでお怪我、あるいは被害はなかったですか。東部の方で風にあおられて怪我をされた方が数名いらっしゃいますけれども、それを除きますと大きな被害がなかったということで安堵しております。きょうはそうしたちょっと落ち着かない中でたくさんの方に来ていただきましてまことにありがとうございます。

この広聴というのは広く聴くということで、県が広くPRをする広報と逆にお話を聴くというそういう会でございます。35市町、1期4年の間に全部行ったんですけれども、残念ながら浜北のこの地でやるのは今回が初めてということで、まことに申しわけございませんでした。しかし、きょうはこちらの浜北区長さんが浜北を代表する地域の男女それぞれのリーダーを選んでくださって、どうもありがとうございます。そしてきょうは県議会議員でリーダー役を務めていらっしゃいます阿部卓也先生もお越しでございます。

実は私きのうから来ておまして、これは移動知事室というのがございます。移動知事室というのは、今私の知事室はこの西部地域政策局長の机が私の知事机になっているわけです。ですから総合庁舎の中に今私の知事室があると。知事室、通常は静岡市内の知事室にあるということになってますけれども、その部屋は観音開きの扉がございまして、お越しになった方、全部開いているわけですね。それが私が最初にしたことです。知事になりまして、まず扉を開ける。

それに対して抵抗したのが、その扉の向こう側にいる20人余りの県の役人でございます。落ち着かないというわけですね。片扉だけ開けて、最終的に両扉を開けるのに1年かかりました。今はもう慣れて、皆さん方、来る者は拒みませんよと、助力を惜しみませんからと、決して見返りを求めたりいたしませんからということでやってきたんですが、なかなか敷居が高いと見えてお越しになりにくいということで、結果的にその扉は出かけていく扉になりまして、4年間で1,200回余り出かけてまして、1年に300回ぐらい。

しかし1回出たときに数カ所回る場合もありますので、そういうふうにはしていませんけれども、にもかかわらず、ここらあたりは割と来やすいですけれども、水窪となるとちょっと遠ございます。あるいは大井川の北の方でも遠いですし、さらにまた南伊豆となりますと、行って帰ってくるだけでものすごい時間がとられますので、それで昨年からは移動知事室としまして、そこの地にとどまって、そしていろいろな問題を直接お聞きして、そ

して一緒に解決の方向を探ると、場合によってはそこで解決してしまうというようにして、今回この移動知事室というのは6回目で、きのうも夕刻夕食を共にしながらこちらの女性のリーダーの方々と懇談をし、かつ意見交換をします。けさも朝から来ております。あちこち回ってまいりました。

昨日は、今浜名湖のシラスあるいはウナギですね、これが採れなくなっているということで、漁協の方たちが親ウナギを放流されるという非常に立派なことをされて、何とかウナギの漁獲を元に戻そうとされておりますが、またアサリも激減いたしまして、その方たちから直接お話を聞くと。あるいは湖西、浜松の方々から農業のリーダーたちのお話を聞いたり、さらにここは蛍光灯がありますけれども、今は太陽光を屋根に張りますと、それを太陽光がずっと全室に拡大するようなそういう会社がありまして、スカイトップライトといたしましたね、株式会社スカイプランニングというのがこの浜松にあるんですね。大変なものです。

そうしたところを回って、それからまた浜松工業高等学校に行きまして、生徒さん20名近くと大変にすばらしいものづくりの少年少女たちとお目にかかって、今朝は今朝で新しい農業をやっている方たちとお目にかかり、また授産所の方たちを雇いながら、ミカンができたり、そういうものをジュースにして何とか仕事をつくらうとしている方たちのところを回ったりいたしまして、そしてこちらに来たということでございます。

きょうはしっかり意見をお聞かせいただきまして、これを県政に生かしていく。腹ごしらえは十分で、きょうは発言者4さんがおつくりになった万葉真菰膳というものをいただきまして、万葉の時代の豊かな食材というものを味わって元気いっぱいということでございます。皆様方きょうは一日長うございますけれども、よろしく願いいたします。以上でございます。

<発言者1>

皆さん、こんにちは。ただいま御紹介をいただきましたが、この浜北区に拠点を置きますアマチュアの吹奏楽団ドルチェウインドオーケストラの音楽監督、そして浜松市民バンド協議会の会長を務めさせていただいております発言者1といたします。本日はどうぞよろしく願いいたします。

私は実は本業というのは音楽とは関係がなくて、青果物、野菜・果物の卸というのが私の本業なんです、きょうは音楽の話をとということでございますので、私の音楽活動とい

う側面からお話をさせていただきたいと思います。

私は母校でもあります県立浜北西高校の吹奏楽部の指導をもう二十数年間続けさせていただいております。高校生をずっと指導しておりますと、卒業していく生徒たちに、「音楽を続けよう」「卒業しても環境が許したらぜひ楽器を続けてね」ということを毎年毎年言い続けて、ここまでできております。そんな中で、それを受け入れる側の社会人、一般バンドというのはどうなっているかというのを考えたときに、必ずしも卒業して楽器を続けている子たちが幸せな環境でやっているばかりではないなということに気がつくようになりました。

そうなりますと、送り出すときに「楽器を続けろ」と言っている責任上、やっぱり受け皿を何とかしなきゃいけないというようなことを考え始めまして、今私が音楽監督を務めているドルチェウインドオーケストラというものを2001年、平成13年に立ち上げたわけです。実はここのなゆた・浜北が同じ歳で、同じ平成13年なんですけど、ドルチェができたときにここのなゆた・浜北もオープンしたということです。

当初、浜北西高校の卒業生を主体にバンドを立ち上げたものですから、ここのお世話になってきた浜北区に拠点を置いて定期演奏会を浜北でやろうと。もう一方の演奏会はほかでやろうというような考えでバンドを進めてきております。

さて、そんな市民バンドなんですけれども、この目的というのは、学生時代に経験した音楽、これを楽しく、そして長く続けることによって、豊かな人間性を構築するというか、そういったものを養い、少しでも社会に貢献をしながら、聞いてくださる方々、それから演奏する本人、みんなが幸せになれる時間をつくっていかう、そういったものを目的として活動しております。

また一方で、私たちのようなアマチュア吹奏楽団というのは、音楽の質を高めるということだけが目的ではありません。もう一方の側面には青少年の健全育成、要するに高校を卒業して18歳、中には高等学校の中で何らかの問題があって部活動が続けられなくなった子、こんな子もいます。我々の社会人バンドは高校生は入団できませんが、そういった特例の場合、御両親の承諾書を得て研修生という形で受け入れるということは一部行っております。それは、その方が音楽からどうしても離れたくないという親御さんの希望があったりする中で、音楽と接することで精神的な意味合いでも何か役に立てるのかなということもあって、そういうような研修生制度も持っております。

また我々のこの社会活動というか、そういったものというのは、私たちが好きである音

楽をずっと続けていくためには、やはり周りからの理解であるとか、協力であるとか、そういうものをいただかないと続けられませんので、そういったことを学ぶというか、そういう機会にもなるんじゃないかなと思っております。

またドルチェができて、もう13年目になるんですけども、5年ほど前に浜松の市民バンド協議会というものを立ち上げました。これは今言ったような、そういう若者の受け皿的なものを市全体に広げて、もっともっとやっていく必要があるんじゃないかなということ考えたので、そういったものを立ち上げたわけです。今、浜松市内には20以上のドルチェと同じような市民バンドというものが存在しております。それぞれが全然違ったスタンスでやっていますので、お互いにそれを尊重して、協力し合って、楽器を続けるには本当にこの地域はいい街だなと言われるような組織づくりというか、環境づくりをしようということ活動しております。

さあ、そして私たちは浜松市民であると同時に静岡県民でもあるわけです。この音楽のまち浜松というものを浜松だけではなくて静岡県の特徴の一つとして、ぜひ広く全国に発信をしていただきたいなと思っております。こういった活動を多くの県民の皆さんに知っていただくためにも、県として音楽のまち浜松を生かした事業を考えていただけたらと思っております。

つい先週末ですね、3日ほど前なんですけど、浜松市の中心部で私が役員を務めている「やらまいかミュージックフェスティバル」というのを開催させていただきました。この中では富士山の世界文化遺産登録記念事業の一環ということで、コラボレーションした企画がありまして、2時23分に語呂合わせで『ふじ山』を全部のステージで歌いましょうというのをやりました。そのときに浜松のマスコットキャラクターである「家康君」と、あと静岡県のキャラクターである「ふじっぴー」が同時にステージに乗るような場面があったんですね。このときというのは、まさに静岡県が誇る財産を浜松が音楽で盛り上げたというか、そういう形になったのかなと思っております。このような県と浜松市という部分で音楽の結びつきができていったら、なおすばらしいのではないかなと思っております。

5分ということですので、もうそろそろ終わりに入っていると思うんですけど、昨今若者の中ではスマートフォンというのが非常にはやっております、はやっているというか、もうほとんどだれもが使っております、つい先日、目にした記事があるんですけども、スマートフォンは人のすき間時間や余白をすべて埋めてしまう。それどころか、すき間ではないメインの時間である家族の会話、恋人とのひととき、あるいは仲間との語り、そ

ういったものをすべてスマートフォンをいじりながらしているという現状、こんなことを危惧されている記事を目にしましたが、やはり私は人が人として生きていく上では、やはり人間関係の構築というのは非常に大事だと思います。

常に支え合って生きているのが人間ですから、そんな環境や時代の変化とともに、移りゆく人と人とのコミュニケーションというか、そういったものを我々のような社会教育団体、社会活動している団体というのは、何とかそういったところを、どういのでしょうか、人と人との関係をつくり上げていくというか、そういった部分で非常に大きな役割を果たせるのではないかなと思っております。

我々のような吹奏楽団はその特質上、練習会場とか、大型楽器の保管場所とか、活動を続ける上での困難な問題が非常にたくさんあります。ですのでぜひ県の方としても、浜松あるいは県下全域でも結構ですし、これらの活動をしていくための環境整備という部分に目を向けていただくと、我々のような音楽にとどまらず、いろんな意味での社会活動をされている団体などが、より有意義に活動できるんじゃないかなと思いますので、ぜひその辺に目を向けていただけたらと思っております。

もう時間ですので、非常にまとまらない話でしたけれども、これをもって私の発表とさせていただきます。本日はありがとうございました。

#### < 発言者 2 >

皆さん、こんにちは。コスモスこどもクリニックの発言者2と申します。きょうは当院の日曜日診療の試みというものを皆さんに御紹介したいと思います。

私のコスモスこどもクリニックというのは、昭和63年の2月に当時の浜北市に開設しました。現在まで25年がたっています。これ数え方簡単でして、63年の2月に始めたので、平成1年の2月が1周年です。ですから今年平成25年の2月で25周年になっています。当時は月曜日から土曜日の午前中まで診療して、土曜日の午後は休診、日曜日は休むという普通のスタイルの診療をしていました。25年間経つうちに17年の7月に合併、浜松市と合併して浜松市浜北区になりました。それから19年の秋には赤十字病院が浜北区に移転してきました。

そのように周りを取り巻く環境がだんだん変わってきたわけですが、ちょうどそのころになりますと小児救急の問題というのが大変うるさく議論されるようになってきました。例えば休日の救急当番に熱が出たから受診したいと行って行ってみると、4時間待

ちですよとか、駐車場がないから車もとめられないとか、あるいは聖隷三方原病院は患者さんが押し寄せて、救急対応をする先生方がもう疲れ切ってしまっているというような話も聞こえてきたんです。

こんな状況の中で、私が丸 20 周年を迎えようとそろそろしていたわけなんですけれども、その 20 周年のころは、20 年間倒れずによくやってこれたなという達成感もありましたし、満足感も私はあったわけなんですけれども、じゃこれから先、同じようなやり方だけでやっていっていいのだろうかということのをちょっと考えたんですね。

その小児救急に対する対応として、旧浜松市の中でつくっている浜松医師会というものは、会員の中の小児科の先生が、私たち鴨江の救急と言えは皆さんおわかりだと思いうんですね、この地区の方はね。現在は伝馬町に移転をしていますけれども、浜松市夜間休日診療所というところに、旧浜松市の医師会の小児科の先生が、必ず 8 時から夜中の 12 時までには出ているということ、交代で必ず出るんだというような対応策をとっていたんですけれども、私が所属する浜北医師会というのはこれ別組織なんですけど、人数も少ないこともありまして、小児救急に対する積極的な対応策がとれていなかったんです。

そういった中で私が 20 周年になるなというふうに考えていたときに、何か浜北区の中で私 1 人だけの決断であっても、何か役に立つことはできないだろうかということを考えていたんですね。例えば日曜日なんかですと、熱が出て診察を受けたい希望者がたくさんいるのに、小児科の先生たちはカレンダーが赤い日だから休みますとって、みんな一斉にばっと休んでしまいますね。開いている救急当番の病院にみんなが殺到するというような状況が生まれているわけですので、そこでゆっくり考えていったときに、じゃ私が 1 人でもできることは、毎週日曜日を診療日にして、自分はそこで働くと疲れますから、ほかのウイークデーに休みをとれば、交換すればできるじゃないかというふうに考えたんです。

ですからそこで毎週日曜日の診療というのをやってみようかなというふうに思い浮かんだわけなんですけれども、それは私が 1 人の人材であるというふうに考えたときに、小児を対象にして診察、投薬、治療ができるという能力を持っている人間だとしたら、それをいかにうまく活用するかという話になるんですね。みんな休んでいるときに、自分も日曜日だから寝ていたら、活用されていることにはなりませんよね。そこで自分が日曜日に診療しますというふうにすれば、この人材が活用されるという状態になるわけですね。それで、水曜日を定休日にして、日曜日は毎週診療しようというふうに自分で心を決めました。

平成 20 年の 2 月、ちょうどちが 20 周年記念になったときから、じゃ日曜日診療の開

始ということに決めました。これは営業日を変更するということになるんですけども、普通の企業にとっては営業日を変更するというのは大変なことです。変更するに当たってはいろんな困難があるんじゃないかと、もうやる前から想像されるわけですけども、実際やってみますと、本当に想像していた困難は全部ありましたみたいな形でした。

日曜日診療が成立し得る条件というのはどんなことなのかということを考えてみました。まず自分のことです。私が日曜日診療を毎週毎週やれるのかということですが、これはひとつ私の条件としては子育てが終わっているということですね。自分の時間を自由に使える人であったということですね。それからそのときの年齢ですとか体力ですとか気力、もしその日曜日診療をやろうというのがもう10年遅く考えたことであつたらば、だめだと、できないなど、気力も続かないしというふうに思ったかもしれないですけども、まだ5年前なんですね、できると自分で考えました。

それから2番目にとっても大事だったことはスタッフの協力です。従業員の方が今まで日曜日は休めていたのに、今度日曜日出勤してこいと言われたときに、やっぱりかなりの抵抗があったということですね。ですからそここのところの話し合いを十分にしなければならなかった。そこが一番大変でした。ですから日曜日に働いてくださる人材というのは、本当に貴重でとても感謝しています。私がいくらやるぞと言っても、ついてきてくれなければ仕事はできません。

それから、意外にやってみると薬局さんの協力というのが大変大事だということがわかってきまして、診察をして処方箋を書きますね。院外処方になっているものですから、それを持って薬局に行って薬剤師さんが調剤をしてくれて、受け取って飲んで初めて治療ができたということになるんですが、処方箋は受け取ったけれども、どこの薬局も全部閉まっていて、薬というものが受け取れなかったということになると治療にはなりません。ですから薬局さんの協力というのは大変重要です。

それからあとは、私が所属します医師会の中での了解を得ないとというふうなこともありますし、あるいは保険診療していますので、事務所の変更の手続きというのが、意外と細々として手続きするのがちょっと大変でした。

これで5年間、平成20年の2月から開始して、もう5年間たったんですけども、じゃ日曜日にどうしても診察を受けなければいけない理由は何かというのが、診察していますとだんだん見えてきました。大きく分けて2つのグループがあると。

1つは小さなグループですけども、生まれて初めて発熱をしたとか、あるいは吐いて



しまったとか、という場合に、やっぱり生まれて初めてですと、あるいは第1子でありますと、親御さんが大変心配して、すぐに診察をしてほしいですというようなことになるものですから、曜日に関わらず日曜日であっても診てもらいたいというふうに御希望になりますね。でも赤ちゃんというものは曜日を選んで病気になるわけではないですね。何曜日でも発熱はします。だから病院がやっている日だけ病気になっていいよっていうふうに赤ちゃんに言うのは、これは無理だということはありません。

それから2番目のグループとして、これは大変大きなグループがあるということがやってみてわかってきました。これは保育園児のグループなんです。最近、保育園待機児童解消とかで保育園に入られる方が大変ふえていますけれども、日曜日に診察していますと、80%が保育園児です。来る患者さんの80%が保育園児なんです。特に入園してから2カ月間というのは、お互いに風邪の移し合いをするんですね。入園したら毎週毎週39度の熱が出るみたいなことが、実際これはもう起こっています。今まで無菌状態に近い状態でお母さんと2人でおうちにいたのが、いきなり保育園にぼんと入るわけですから、お互いに病気のやりとりをして、毎週何かの感染症ですね、ウイルス性、あるいはばい菌による感染症にもかかります。

親御さんの方も、仕事を開始してまだ間もないものですから、休ませてほしいということを出しづらいものですから、じゃお母さんが休みの日までちょっと様子見ようねみたいにして、待たされて様子見をおうちでしていると、だんだんこじれてしまって、日曜日に私のところに来たときには、もう大変具合が悪くなっているねということもよく見ます。ですから保育園児というグループが大変大きな問題なんだということが、だんだんに5年間でわかってきました。

それで最後にですけれども、日曜日診療をやっているの感想といいますか、考えたことを2つ言いますと、自分の立場、医療関係者として考えたことは、将来的にはどの曜日にも、どの時間帯にも医療を提供できるようなシステムが構築されているといいなというふうに夢ですね、そういう状況になるといいなというふうには考えました。

一方で、それに対する意見というのも今盛んに実は言われていまして、コンビニ診療という言葉ですとか、ワンコイン診療というような言葉が言われています。これは、やっているんだから診てもらって、500円払えば診てもらえるんだねと。そうすると、軽い症状で、実際は別に病院に行かなくても、1日1晩ぐらいは様子見ても大丈夫だった人まで、病院やっていて500円なんだから行こうというふうに言って、ばっと患者さんが集まると、そ

こが大変というようなことがあって、そのワンコイン診療、コンビニ診療というのは、実はちょっと非難的な意味合いを持って発言されることがあります。

だけど、それを言っている人たちというのは何を考えて言っているのかというと、そんなことするなよと、来ないでくださいと言っているんです。1晩見られるんだったら、おうちで様子を見てから翌日の月曜日に病院に行ってくださいというふうに言いたい方たちがそういう発言をします。

だけど、それは医療関係者のエゴといいますか、わがままといいますか、能力を持っている人間がそこにいるんだから、曜日を工夫すれば何とかできるんじゃないか。さっき言いましたように、赤ちゃんは曜日を選んで発病するわけではないんですね。何曜日でも発病します。たくさん軽い人もいるかもしれないけれども、中には重症の方もいます。そこで日曜日だから診ないよというふうに言われるのは、大変親御さんとしても辛いのではないかなというふうに、1つ医療関係者の方の感想としては、いつでも対応できる医療システムが構築されるといいと思います。

それからもう1つ、先ほどの保育園児がふえているということに関連してなんですけれども、保育園に通う生活というのは大変きつい生活だなというのが本当にだんだんわかってきました。といいますか、私自身も自分の子供2人を保育園に通わせながら自分は仕事をしてきました。

そのときの状況を振り返って考えると、時間の余裕がないです。仕事をして、子供の世話をして、保育園から帰ってからですけれども、ごはんをつくってあげて、お風呂に入れてあげて、寝かしつけて、また翌朝起こして朝ごはん食べさせて送り出すと。さらに昼間は仕事をするというようなことなんですけれども、そういう時間に追いまわされているような生活をしていると、心の余裕もなくなってきました、子供がちょっといたら怒ってみたりとか、叱りつけてみたりとかというようなことになっていくわけですが、女性の能力の活用というようなことは国の政策としても打ち出されているものですから、お母さんたちは私に能力があるんだから働きたい、働いてお給料が欲しい、収入が欲しいというようなことも考えるんですけれども、じゃ保育園に入れましょうとって、待機児童の解消というような言葉も言われていますね。

みんな希望者が全員保育園に入れるように、待機児童を解消するように保育園をふやしたいというようなことが政策としても出てくるし、マスコミでもそういう論調で話されていますけれども、じゃ保育園に入れましょうと決めたときに、それはお母さんが「私は仕

事に行きます」と言ったときに、その問題のところにもう1人当事者がいますね。それは赤ちゃんです。赤ちゃんが保育園に通うわけですので、じゃ赤ちゃんというのは行きたいか、行きたくないか、意見を言いましたかというのと、赤ちゃんたちは言いません。「あなたは保育園に行きたいですか」「行きたくないですか」と聞かれることもないし、お返事も「行きたい」とか、「行くの嫌だ」とかって言いません。だけど、お母さんが私は保育園に子供を入れるわと思ったら入れられてしまうわけですね。

だけれども、私が毎週日曜日に病気になった保育園児たちを診察していて感じるということのは、その発熱した小さな体で赤ちゃんたちは実は「保育園には行きたくないよ」と言っているように感じられるんです。病気がいっぱいのある場所に、友達はいっぱいいるけれども、病気もいっぱいのある場所に僕を連れていかないでと言っているように思えるんです。

そうすると、ですから保育園には行かないで、毎日おうちでお父さんやお母さんと一緒にゆっくり過ごしたいと言っているように、その病気の子供を見て感じるんですけれども、余りに病気がしょっちゅうである方には、ときどき聞いてみるんですね。「保育園やめたらいかがですか」というふうに質問をしてみますと、大抵の返事は「うーん、経済的に無理だから」というお返事が大抵返ってきます。お金の問題になってくるんですね。だけれども、やっぱり子供のそういう病気がいっぱい環境に小さいうちから入れるというのは私は賛成できないんです。

ですからもし経済的に可能であるならば、せめて3歳までは自分の手元でゆったりと育てたいと思うんですね。現在いじめのことですとか、虐待ですとか、不登校のことですとか、いろいろ中学生ぐらいになったときの問題が出てきていますけれども、人生の最初の3年間を親元でゆっくり過ごしたときの経験というのは、大きくなってからのいろいろなトラブルを防ぐ力になる3年間ではないかなと思います。

ですから、その辺のマスコミの論調が、保育園をいっばいつくって、みんな待機児童を解消して保育園に入れて、お母さん、女性は仕事をしましょうみたいな論調で、今マスコミでは言われていますけれども、私はそれには賛成できません。3年間は手元で育ててほしいなと思いつつながら診察を毎日曜日にしております。以上です。

<県知事>

コメントというよりも、もうただただ感心をして聞いておりました。さすが浜北区長さ

んが選ばれて、子供たちの心と、それから体を健康にするために日夜尽力されているお2人のお話を承って、非常に感じ入った次第です。

まず発言者1さん、浜松というのは楽器のまちというふうに長く言われていましたけれども、これをウインドアンサンブルを通じて、発言者1さん御自身がサクソフォンの名奏者でいらっちゃって、そしてその音楽で知った喜びを子供たちにも伝えようということでウインドアンサンブルをおつくりになって、そして仲間たちを募って、ここを音楽のまち、あるいは音楽の都にしていこうという志をお持ちで、それを全体静岡県にも広げていきたいと言っていらっしゃるわけですから、これはもう本当に素晴らしい試みだと。

これどういうふうにすると広まるかなと。ここにきれいなお花があるんですけども、これクルクマじゃないですか。これたしか浜北では熊本に次いで2位でしょう。ガーベラがごございますね。ガーベラは日本一ですよ。花と音楽で合うんじゃないですかね。花と音楽を聞いていてもお腹も減るから、食もあるでしょう、今は次郎柿も。先ほどは発言者3さんの梨をいただいたんですけども、ともかくそういう来年花博がごございますので、そのときに音楽のまちとしてのアピールを食の都、または音楽のまちとしてのアピールを県や市が一緒になってやりますので、それを何かできないかなというふうに感想を持った次第です。

それから発言者2さんには本当に感じ入りました。25年間、子供たちのためにクリニックの院長として尽力されてこられまして、本当にありがとうございます。そして平成20年からはこの5年間、日曜の診療を始められたということで、それをするのに困難が幾つもあった、それを乗り越えられて、常に子供たちの立場に立って診療されていると。

考えてみれば日曜なんて200年前にありましたかね。ありませんよ。大体日曜なんていうのは太陽暦を入れてからじゃないですか、明治時代に。何で何回も休まなくちゃいけないんですか。昔は盆と暮れだけじゃないですかね。そうだと思うんですよ。そうすると、あんなんだ、これは旧約聖書の世界だと。

旧約聖書は皆さんお読みにならないでしょう。ホテルに行くと聖書が置いてあるんですよ。眠たくなるために置いてあるんですけども、それを最初の1ページだけ読むと、天地創造の話が書いてあるんです。神様が、男の神様ですけども、天と地を創造されて、光と闇を分けて、そして水と陸を分けて、そして植物をおつくりになって、動物をつくられて、それで5日目です。かなりしんどくなられたんですね。6日目になられて、もうそろそろ人に任せようというので、自分の姿に似せて人をつくったわけです。神様の姿に似

せて人をつくった。したがって人間というのは神様と同じ体をしているらしい。1人の男性のあばら骨でイブをつくって、2人で、これはおまえたちのためにつくったから、産めよ増やせよ地に満ちよとおっしゃって、そして6日目、土曜日ですね、ああ疲れた、梨でも食いたいなど思いながら、7日目に休まれたわけですよ。だから日曜日ができたわけです。

これはもうもともとは日本とは関係ないですね。古事記の世界に日曜日ありますか。ないですよ。ですからこういう暦というの、向こうから伝わってきたものであります。したがってもう一度人間本来のあり方に考えて、子供たちは日曜日を選んで病気になるんじゃないんだから、やってみましょうということで、今デパートでも、あるいはSAでもPAでも、日曜日に働いているところがありますが、お医者さんの世界というのは日曜は休診するものだというふうに、これは神様が決めたものだ。どの神様だ。決してイザナミイザナギじゃございません。そんなわけで、そういうところがある。

それからもっとすごい発言は保育園のことで。待機児童というのは、保育園に入れないので待機しているというふうに通常はとられているんですけども、子供たちが待機している、何を待っているのかというと、お父さんお母さんの帰りを待っているんだというお話ですね。ですから、保育園に入れたい入れたいと言っている親のエゴではなくて、子供の立場からするならば、何を本当は一番待っているかということ、お父さんとお母さんの愛情を待っているんだ。そういうところに帰るのが筋じゃないかというふうにおっしゃっているわけです。

これは非常に重要な問題提起でありまして、差し当たって子供の犠牲になって仕事をやめていくと。だけど子育てほど大切な仕事はありますまい。だって生まれるまでは羊水の中にいますから、いわば水中の生物ですよ。それが突然陸の世界に出てくるわけですから、一人で生きていけないわけです。どうしても不安に違いないので、愛情でもってそれを支えていかざるを得ないということですから、その愛情を注ぐことができる一番身近な存在はお母様でありお父様ですから、その存在から引き離すということがいかに過酷なことであるかと、子供の立場に立ってみれば、ということをおっしゃっているわけですね。

ですからこういう斬新なというか、あるいは本来の医療の立場をお考えになって、勇猛果敢に何か本当ならよろいかぶとでも着て戦わなくちゃいけないところですが、このように美しい先生が優しい心を持って何でもないことに言われていますけれども、聞く人によっては、もう既得権益の方たちは相当「何ということ言っているんだ」とか思っている

人がいるかもしれませんが、本当に立派なことだというふうにはお聞きしまして感じ入った次第です。どうもありがとうございました。

< 発言者 3 >

宮口で果物を栽培しております発言者 3 です。よろしくお願いします。

農業者がきょうは私だけということで、ものすごく緊張しているんですけども、肩書きにもありましたとおり、県の青年農業士西遠部支部の支部長もやらせてもらっております。今浜北には 4 人いるんですけども、西部、浜松市、湖西市を全部含めると 24 名の若い青年たちが農業の勉強をしております。この 24 人たちは頑張っているんですけども、さらに上に行く農業を目指そうと、県力も借りながら、自分の力も出して頑張っております。浜北の中でも頑張っているグループがありまして、自分も在籍しているんですけども、アグリユース浜北というこれも若手の農業者のグループがあります。

まず農園のことから話したいと思っておりますけれども、主に私の農園ではミカンと梨とブルーベリー、最近ではグレープフルーツの栽培も始めました。労働は家族 4 人、従業員、パート合わせて 10 人、総面積約 8 ヘクタールで栽培をしております。

生産物を生産、販売をするだけでなく、加工品の方にも力を入れております。農園では 6 次産業、聞いたことのある方もいらっしゃると思うんですけども、農家が第 1 次産業、第 2 次産業は農家が加工までやる、3 次産業は販売、流通までやるという、1 足す 2 足す 3 で 6 次産業という形で、私たち農園は販売まで今はやっております。

最近では畜産農家と連携をとりまして、オリジナルのアイスクリームをつくりました。いろんなイベントに出店して、私たちの本当の果物の味を皆さんに食べてもらいたいということから、宣伝になっちゃうんですけども、10 月 26 日、10 月 27 日に開かれます「家康楽市」という「浜松パワーフード」の祭典に出店させていただきます。

先ほどの私の入っているアグリユース浜北というグループですけども、10 年前に設立しました。平成 15 年にスタートを始めたんですけども、その当時は 10 人の若い仲間が集まって、食育活動の一環として、有休農地を活用してサツマイモ栽培を地元の保育園を対象に始めました。

当初は、今有休農地と言いましたけれども、今では耕作放棄地というちょっと名前が変わってしまったところもあるんですけども、昔は有休、草が生えていてもまだできるよというような感覚の土地が多かったんですけども、最近では耕作放棄地ということで、

もう畑やらないよという畑がすごくふえてきたんですね。そういう畑も借りながら、私たちアグリユースはいろいろ活動してきたんですけども、その中で保育園と一緒にサツマイモ栽培を始めて食育活動をやってまいりました。

サツマイモをつくるということで、10人集まったんですけども、その中に何と野菜農家は1人もいませんでした。浜北というと果樹と植木のまちなので、野菜農家を探すところからいくと、まあ大変で、これはもうみんなで探したんですけども、だれもいませんでした、当時は。最近になってやっとふえてきたんですけども、やっぱり地元適地適作として言葉があるのかなということもあるんですけども、本当に浜北の中でも東は砂地、西へ来るほど石がごろごろした畑になっています。

東の砂地の方ではサツマイモをつくっているんですけども、西に来るほど、だんだん野菜がつかれなくなってくるということから、農家もいろいろ探してきて今に至っているんですけども、当初はその土もつくるのに、皆さんプロの土づくりの皆さんでしたので、サツマイモも上手にできたんです。年に1園ずつ対象にサツマイモを植えるところから、草取りを始め、そして収穫までしました。

園児は畑に入れば夢中で虫をつかまえたり、泥だらけになったりと、サツマイモのことはどうでもいいような感じだったんですけども、土に触れていると、1人の子供に「地球に触っている」と言っていたきました。すごくうれしかったんですけども、その話をお芋を持って家に帰った園児が、お父さんお母さんに1つ1つ収穫からお芋の話をしていただいたことと思うんですけども、今になってその大きくなった園児たちが、「あのときサツマイモを掘ったよね」と思い出して話しかけてくる子もいます。

そういう食育活動を経て4年前、全国農村青年教育振興会の主催する青年クラブ表彰において、浜北のアグリユース浜北が農林大臣賞を受賞しました。この大臣賞受賞に当たっては、決してこういう目的でやっていたわけではないんですけども、そういうお声がかかったことは会としてもものすごくうれしかったです。今では会員数も23人とふえ、活動や作物を広げ、これも来週なんですけど、10月26日、10月27日に「浜北産業祭」が、「家康楽市」とかぶっちゃったんですけども、ありまして、そちらでもアグリユース浜北、ブースを持ってサツマイモを販売させていただきます。

近年では新たに農業をやりたいという新規就農の方もふえてきまして、今アグリユースでは3人の方が入っております。私たちの農園でも3人の研修生が今ミカンをやりたいということで3年前に来まして、今やっと巣立って自分でミカンを栽培しております。今も

3人の研修生が入っていきまして、何とミカンではなくて今度はブルーベリーをやりたいということで勉強しております。

農業をやりたいという新規就農者がいるんですけれども、畑が見つからないという問題が出てきております。畑って普通に皆さん見ていただくと、つくっている畑もあれば、草の生えている畑もある。ハウスのビニールのかかっている畑もある。なるべく作物に合った畑を選ぶところからいきますと、ブルーベリーですと、ビニールハウスがすごくつくりやすいですね。そのビニールハウスをまた探す努力に一苦労しております。

ここが僕の今一番の言いたいところなんですけれども、農業を営んでいて最も苦労している点でもあるんですが、現在耕作放棄地となっている畑を持っている地主さん、また農業をやめていく地主さんに畑を借りたくても貸してくれないという問題が今出てきております。最近では農業地帯と商業地域、浜北は特に人口が今ふえておりますけれども、農業と商業の境がちょっと崩れてきているかなというふうに思います。周りの環境も住宅が隣に來たりして、臭い、うるさいというような形で苦情がくると、農業者はそこで作物をつくるのを嫌がるんですね。なので、なるべくそこに境をつけてもらって、農業地帯、商業地帯、なるべく区別のできるような浜北市、静岡県になっていただきたいなと思います。

今私たち農園でも16カ所の畑があります。きょう台風が去って、畑16カ所を見て回ったんですけれども、全部見て回るのに2時間ほどかかります。小さい畑を借りていると、隣にも草がぼうぼうに生えている畑があるんですけれども、これいいなと思っても、なかなか貸してくれません。そういう問題があって、大規模経営になかなか伸びない点があります。畑が大きくなれば機械を変えたり、時間のロスもなくなって、すごく栽培しやすい経営になっていくんですけれども、そこがどうしても引っかかってしまって、今の問題点となっております。なるべく皆さん、県の方、市の方にも力を借りて、耕作放棄地をもっと借りやすく、作物をつくれるような協力をいただけたらと思います。活動報告と発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

#### < 発言者4 >

浜北万葉食研究会「月草の会」の発言者4です。よろしく申し上げます。

きょうは早速ですけれども、きょうの報告になってしまいますが万葉食、今まだ営業したのが2回目、3回目ぐらいですかね、真菰膳というのを知事に食べていただきまして、本当にありがとうございます。これからまだまだ研究しながら、いいものにしていきたい



と思っています。

私たちの会の紹介ということですが、私たちは平成5年に生涯学習課の呼びかけに賛同して10回の講習会を受けて、平成6年1月に月草の会を立ち上げました。というのは表向き。実際には今、月草の会は来年20周年になりますけれども、何でそこまで続いたんだろう。大変なこともありましたけれども、実は生涯学習課の呼びかけに賛同したのは事実です。でもその1年前に私たちで「あそこで万葉食をつくりたいね」「つくりたいから何とかできない？」と声を上げました。それに対して、提案したのに対して、じゃあやれる人で早くなつたけれどもやろうかというので呼びかけをして学習会を開いていただいたわけなんです。やっぱり自分たちで思ったことを行動した方がいいのかなと思いました。

万葉亭で万葉食をつくっている上で、今地産地消とか言われていますけれども、地元の農家との提携というのを最初は考えたんですが、万葉食で使うものはなかなか難しいところがありまして、農産物、市場に出るものではございません。ほとんどの食材というのが自分たちの身の回りにあるもので、万葉歌に歌われている食材、それを食べてもいいものと、そうでないもの、野にあるものというのは、本当によく似た植物がございますけれども、それを専門医に教えていただきながら、あちこち本当に野山を駆け歩きました。

その中で、これは食べられる、これは食べられないという中で、今の万葉食ができてきたわけなんですけれども、今一番気にしていること、何とかならないかなと思っていることは、万葉の森公園は、万葉植物園と言ってもいいくらい、300種以上の植物があります。でも、原種に近いもの、それでそろえました、スタートするとき。でも何か寂しい感じがします。原種を守ってほしいな。何とかそれをつなげていってほしい、そういう植物園を絶やさないといいと思います。

今野草を見ていて、季節についても環境の学習なんかをして子供なんかと話しているときも、秋の七草が夏の七草になっちゃったねとか、気がついたら日本古来のもの、それが絶滅危惧種になっちゃっているという状況で、万葉食というただ単に普通の主婦のグループが、その食材を探して歩いてだけでも自然の中のそういった変化、それから実際にどうしていったらいいのかなと考えながら、できることをしているんですが、それでも自然の中で淘汰されていくもの、私たちの「月草の会」というのはツユクサのことです。

ツユクサ。色がつく草という意味のツキクサという万葉名なんですけれども、いつのまにかお月様の「月草」と書くようになったみたいなんです、「月草尔 衣者将措 朝露尔 所沾而後者 徙去友」（月草に衣はすらむ朝露に濡れての後はうつろひぬとも）、なんというよ

うな、どちらかという色が移ろいやすい、変わりやすいという、つきやすい草なんだけれども移ろいやすいという、浮気っぽいというような意味もあるんですが、私たちとしては浮気っぽいわけではございません。地域に根を張って、雑草のごとく、そしてかわいくやっていきたいと思っています。

その中で先ほど言った一生懸命探し求めている当時の歌に詠まれたような食材、それが手に入るように、周りの方も協力してほしいなと思っています。何か人間も日本人って弱いのかなと、そんな言い方してはいけないんですが、ツユクサも外来種にほとんど席卷されて、大きな花を咲かせるのは外来種の方ですね。タンポポなんかは西洋タンポポがあちこちに咲いていて、日本の本当に原種というのは探しても探してもやっと思つかるかどうかというような状況、秋の七草のフジバカマももう絶滅危惧種とっていますけれども、植物には命があります。私たち動物も当時からあったものですからいただくようにしています。

話が突然変わりますけれども、今森で困っているというので、新芽を食べてしまって、若い芽を、せっかく森の力を再生しようと思っても、なかなか食べられてしまって困っている、かわいけれどもシカを何とかできないかというので、今シカ肉のジビエ料理というのをイベントでは使っていますけれども、これからまたそれを使うというような食も皆さんにイベントだけじゃなくて提供したいと思っています。

今言った動物に関しても1つ、きょう召し上がっていただいたヒシの実というのは草ですけれども、ありましたけれども、育てても育ててもというか、野生にあったものを、そのままだとなってしまうので、うちの田んぼに池を掘って育てているんですが、育てても育てても食べちゃうんです、芽を、若い芽を。ツルが伸びると切ってしまう。何かといたらジャンボタニシとザリガニなんですね。そのジャンボタニシも外来のもの。もといいたツボというのはどこにいったのかな、探しても出てこない。ザリガニもアメリカザリガニです。日本のザリガニは少ないです。

そういう状況をそのまま放っておいて「食の都」と言っていていいのかな。野菜とか果物とか水産物とか、とても豊富にあります。でもなくしてはいけないものもあると思います。旬のとき旬のものを食べる、地産地消といいますが、万葉食はそれを地でいっています。それでも、もう手に入らない、周りで手に入らないものが多くなったことがすごく寂しく思います。

今度、商工会と連携して、6次産業とっていますけれども、新商品の開発プロジェクト

トというのを立ち上げ、それがマコモダケの商品化プロジェクトというものなのですが、実は1年前にマコモダケ、万葉で取り上げてやりたい、大地の主、地球の主と言われるぐらい神話にも登場するような昔からあったマコモを利用して、万葉食、貴族の御膳、真菰膳をつくっていきたい。それで先ほど言ったように2回目のお客様が知事さんだったんですね。

あと、先ほど次郎柿というのが出てきましたけれども、浜北特産の次郎柿、それを器にしまして、その中に青のりの酢の物を入れて、その上にジュンサイを載せた、そういう「にぎめ柿」という、この名前そのものは奈良の万葉文化館の館長さんだったんですけども、それを何かのイベントではいつもお出しするようにしているんですが、もうなくなってしまいました。次郎柿のできるころ、旬のときに食べられない、旬を閉じ込めた旬の味、そういうものもありかなと思います。

先ほどのマコモも10月、11月まであるかなというような短い期間しか使えません。その中で今一生懸命やっているのが乾燥させて、お日様の光を浴びて、ビタミンDも豊富になりますし、日持ちもするようになる。業者さんの力、機械の力を借りることは簡単です。でも私たちはそういうやり方でも、当時の人がもしかしたらやったんじゃないかと思うようなそういう方法を使って食材を提供したいなと思い、1年中提供できるようになったら、また皆さんそういった乾燥させたものが出回っていると思ってください。以上でございます。

#### <県知事>

お2人からの食に関わるプレゼンテーションがございまして、大変勉強になりました。発言者3さんの方からは、保育園児、幼稚園児も入っているかもしれませんが、サツマイモに触れさせる、大地、地球に触れているというそのフレーズが素晴らしいですね。ですから先ほどの発言者2さんから保育園の持っているマイナスの側面についてお話を承ったんですけども、やっぱり一長一短あるのかなというふうに思いました。何とかこれ両立できないものかと。

保育園にお母さんがそこに行って保育園で同じようなお母さんがいらっしやると、子供は感染症にかかる場合もあるかもしれないけれども、お母さんは母親力をつけるというようなメリットもあるかなとか、子供一人で不安でしようがないと。しかし先輩お母さんがそこに来ていれば、そこでいろいろなことを学ぶことができると。それが何か仕事につな

がるためには資格を差し上げれば良いということで、今保育士の資格を取りやすいように、今藤枝市と富士市で実験的に募集をしたら、定員の何倍という人たちが来て、定員で切るというから、それはだめだと、全員受けてくださいというふうにして、そういう動きをしているんですが、先ほど発言者2さんのお話を承っていて、子供が待っているのはお母さん、お父さんだということであれば、お母さんが一緒に保育園に行って、かつそれが何らかの将来の役に立つようなことに結びつけばいいかなと、そういうようなことを今試みているわけです。

さて、その大地に触れているという中で、その大地が遊休地、草むらになっているのは何事かということでお叱りを受けまして申しわけございません。私も静岡県下、実は全耕地の17~18%が耕作放棄地になっているんですよ。それを私4年前に知事になったときに知りまして、そして日本全体では耕地の大体7~8%が遊休ないし耕作放棄地なんです。その2倍以上が静岡県下で放ったらかしにされているというので、これは大変にぐあいが悪いというふうに思いまして、耕作放棄地を耕作地にかえるという大方針を立てました。

そして平成21年度には200ヘクタールぐらい戻したわけです。しかし全国の順位では17位でした。平成22年になりますと600ヘクタール余り戻してくれまして、そして全国で3位になったんですよ。だから今、大体2,000ヘクタールぐらい戻したんです。だけど1万2,000ヘクタール遊休地なんですよ。そのうち、先ほどのもう農業をやめたという方がいらっしゃる。つまり不在地主がいるんです。それが6,000ヘクタールぐらい持っているんですよ。そこは放ったらかしです。もうどこかに行かれたか、あるいは完全に地主なんだけれども、農地なんだけれども、全く自由がきかない。10年も放ったらかしているならば、それは罰則で農地にかえるように強制的に何とかならないものですかね。

ともかくどこかトップで、決してその人の土地を奪うんじゃないと。しかし遊休のまま、耕作放棄地のまましておくのはやっぱりぐあいが悪いんじゃないかということで、それを耕作地にかえると。耕作地にしたいという人がいるということなので、何とかこれはやりたいと思います。今残り6,000ヘクタールのうち、2,000ヘクタールまでやりましたけれども、やっぱりそのうちの3,000ヘクタールぐらいは非常に厳しいんです。坂であったり、耕地に戻すのは非常に厳しい。そういうところはむしろ自然林に変えようかという動きもあります。

ともあれまだ1,000ヘクタール以上、遊休で放ってあるままになっているところがありますので、こうしたところを、せつかくまだ発言者3さんが若者の農業家として今子供た

ちを食育して育てながらやっていらっしゃるので、これは励まさないといけないということで、耕作放棄地の問題は県を挙げて取り上げていきたいということで、しっかりやります。ということでもあります。

それから発言者4さん、本当に先ほどは私が2番目に真菰膳を、マコモダケを使った料理を全員でおいしく頂戴いたしました。本当にごちそう様でございました。しかしながら、そういう万葉の時代、これは7世紀、8世紀ですから、今から1300年、1400年ぐらい前の話です。そのときに何を食べていたかということに御関心をお持ちになっている大変な文化的な御関心の高さということだと思います。

万葉集というのは4,500余りの歌が出てくるわけですが、そこにたくさんの植物が詠み込まれているんですよ。万葉集の特徴というのは巻20まであるんですけども、巻の端に春夏秋冬というふうに季節ごとに歌を編集しているんです。これはもともと詩歌というのは中国から来たものですね。

詩経というのがありまして、詩のお経といいますか、そういうものを活用しながら日本人が五七五七七というふうな短歌に最終的にはなり、あるいは俳句になるような元の長歌、七五七五七五七五七七と終わっているんですね。そうしたものの中で一番有名なのが五七五七七ですから、そういうのが4,500あって、そのうちの恐らく3分の1ぐらいのところには植物が詠み込まれているんですよ。その植物というのは、これは花を咲かせますので、また実をつけますので、ですから人にとって大事な花、大事な植物が歌い込まれていたに違いない。これを大事にしようというのが、そもそもの私は発言者4さんの志ではないかと。そうした中で食べられるものがあるので、これは食べて楽しいので、またその食べながら万葉の歌だとか、あるいは万葉の時代の自然観だとか、これを学ぶという。勉強するとなるとしんどいですけども、食べるとなれば自然に知識も入ってくるという、ですからこういうやり方がいいと。

外来種にどんどんやられているということも、そういうことを調べなければわからないわけですね。それを調べてくださって、今私もそのことに関心を持ちまして、そもそも静岡県にどれだけの食材があるかということを知ったときに、元経済産業部長が今大学の教授をされています。彼ですら知らなかったんですよ。ですから静岡県でどれだけの農産物がつくられているかということについては、つくっている人は知っています、何をつくっているか。しかし全体でどれだけかということを知らなかった。皆さんも知らないでしょう。これは農水省の統計書に出てくるから、167品目つくっていると出てくるんですよ。

ところが、浜松の人というのは割とその辺に熱心で、浜松のJAが調べたら 177 あったんですよ。農水省の統計より 15 多いじゃないですか。その農水省の統計は間違っている。それで数え直したら 339 あったわけです。2 倍以上あったわけですよ。ですからそれがつい最近わかったんです。海産物も農水省の統計では 50 です。ところがそれ勘定し直すと 100 あったんです。このお花も販売している、園芸でつくって自分でつくって売っていると、農水省の統計では 17 品目しかなかったんです。ところが実際に数えてみると 704 あったわけです。ですからそれがわかりまして、ようやく、それだったならば、なぜこんなにたくさん植物ができるんだろう。

そうすると例えば南アルプス、赤石山系があると。赤石山系というのは、南アルプス、その向こうに中央アルプスがあって、その向こうに北アルプスがあるでしょう。北アルプスというのは、冬は長く雪に閉じ込められます。中央アルプスも似たようなところがあります。しかし南アルプスはどうでしょう。こういう南風が当たりますので、早く雪が解けて、早く植物が芽を出して花を咲かせますね。ですから 3,000 メートル級のところから、こういう平野に至るところまで、たくさんの違う形の植物がざあっと垂直に分布しているんですよ。

そういう生物が多様であるということで、ことしの9月にエコパークに申請したわけですよ、ユネスコに。来年の夏くらいにはユネスコのエコパークになります。そうすると、どれぐらいの植物があるかということがわかり、そして要するに絶滅危惧種になるのがどれぐらいあるのかとか、ないのかとかということがわかります。ですからまずはデータを調べるという、これはちょっと退屈な仕事ですけれども、やってみるとおもしろいんですね。一旦わかってしまうと、それはもう確実な証拠ですから。これはしなくちゃいけない。

そうしたことをやりながら、今本来の在来種がどういう状態になっているか。そして外来種がどれぐらい侵略してきているかということもわかっていく。同時に当時のものと比べて大分品種改良がされてきています。次郎柿も当時はなかったと思いますね。これもたしか外来のものでしょう。元々日本になかったと思いますが、そうしたものが日本に根付いて、そして品種改良されて次郎柿だとか、いろんな青島のカンダとかができてきているので、私は決して外来のものが即悪いとは思いませんけれども、在来のものでなくなってしまうということについての危機感、これはやっぱり共有しないとイケない。

どういふふうにして共存させるか、またなくなってしまうものを保全するかというそういう試みは、そういうたくさんの植物種があるところでやるのがいい。それがどこかとい

うと、私は浜松の南に行く大変ですので、このあたりだと、学者もこういう民間の学者の方がいらっしゃるの、こういう方は農業士ですから、この方はもう先生なんですね。学校の先生だけが先生ではありません。ですから実際に自分が関心を持ってしっかり調べている方たち、その人たちは若い人たちにとって、あるいはそれ以外の人たちにとって先生になれるので、そういう人たちがいる場所でやるのがいい。

特にここは人口がどんどんふえていっているということで、これから多くの人が来られるので、ここに大地がどういう、何と申しますか、恵みをもたらしているのかということについては、一緒に調べていく必要がある。そしてそうしたものによって飾られて、お花、あるいは実があるもの、これで飾られて、いわば花のようなまち、ガーデンシティとでもいいますが、そうしたものに今できるんじゃないか。さもなければ乱開発になり、あるいは耕作放棄地もうまく元に戻せないかもしれない。ですから私はこの浜北が、この長い浜松市の中でちょうど副都心ともいわれるぐらいのところでございますが、この副都心は従来の都心とは違って、緑豊かで、水と、そして大地と、それから山と、これを全部持った地域だと。

ちなみに水と太陽が何をつくるかということと生命をつくるわけですね。ですからこの生命というのは、水と太陽の私は作品だと思います。水の流れというのは、木を倒してみてください。木を倒すと、上の方は枝が細いでしょう。だんだん、だんだん太くなりますね。川の流れと一緒にないですか。だから川の流れを天に向かって立たせるときの形になります。ですから水が太陽に向けてつくり上げる、これは芸術だというふうにすら思います。ですから私はこういう水が豊かで、かつ太陽に恵まれているというところは、こういう大地につくられている自然の芸術というものに人間が手を入れて、そしてさらにそれを大事にしていくという、それに向いている土地じゃないかというふうに思いました。

以上、大変感心したということを少し長く言ってすみませんでした。ありがとうございました。

<発言者5>

私、浜北柔道協会の理事長をしています発言者5と申します。仕事の方は駅前とここ浜北の寺島の方で柔道整復師として接骨院を行っております。柔道協会の報告を座らせてお話しさせていただきます。

浜北柔道協会は、浜松市体育協会浜北支部に所属してございまして、小学生から中学生、高

校、大学生と浜松柔道協会下部組織に浜北柔道スポーツ少年団があります。主に、単一種目柔道だものですから、毎週水曜日、土曜日の午後7時から9時半まで浜北の武道館を利用させていただいて柔道の稽古を行っています。スポーツ少年団としてほかの競技団体、特に少年野球、サッカー等は小学生までで卒団という形で、活動が切れてしまっているところがありますが、うちの場合は本当に中学、高校、大学へ行っても、リーダーとして少年団活動に携わっていただいています。

団員は約100名ほど今います。指導者も二十数名いますが、指導者も全員浜北柔道協会会員として年会費を払い、ボランティアとして指導に当たっていただいています。私もやっぱり仕事柄、終わってから武道館へ駆けつけるような状態でもあります。

一応スポーツ少年団組織として少年団活動に積極的に参加していきまして、小学生においては、県西部、浜松市、浜北区でもやっておりますが、少年団の交流大会、レクリエーションスポーツをしたりとかドッチボール等々、競技、単一種目に関係なく、いろんなスポーツに関われるようにそういった活動にも参加しています。

それから今月末になります。天竜川河川敷のごみ拾い等、ここのロータリークラブと協力してごみ拾い、奉仕活動も行っております。

私たち浜北柔道スポーツ少年団の基本方針ですが、「結果にこだわらない」。今どうしても全柔連の問題もありますから、勝つこと至上主義、特に小学生であっても、勝てばもちろん保護者もうれしいですし、指導者もほめられるから、また結果を出すことに執着してしまっているところがあると思います。スポーツ少年団組織自体が、前のオリンピック、東京オリンピックのときに、明るる年に日体協が組織して、もう少しスポーツに関わり、楽しくスポーツを続けられるようにという形で発足したのがスポーツ少年団の組織だと思えます。

どうしてもやっぱり結果にこだわるというところで、子供たちが切り捨てられる部分もあります。その中でうちの場合は日ごろの稽古、試合へ向かう姿勢を評価する。評価していく過程の中で、必ず継続していけば結果は出てくるものだと思います。私自身がきょうお見えになっている県の柔道協会名誉会長に育てていただきました。

その中で、やっぱり小学生の間にこじんまりしたきれいな鉢植えのような選手をつくらない。小学生の間は日々体が大きくなっていく。大きいから大きな技を教えてしまって、そのとき勝つことだけをしてしまうと、やっぱり成長過程で体格が逆転してしまうと勝てなくなる。勝てなくなるから嫌になってやめてしまう、中途半端になってしまう選手を幾



つも見てきました。うちではやりませんが、その中で基本、いわゆる学年、経験年数に合わせた基本練習を行っております。

話は変わりますが、平成24年から中学校の体育授業において武道必修化が始まりました。柔道もしくは剣道といったところを学校側が選択して体育授業の中に取り入れています。私も3～4年前から複数の中学で体育授業、柔道の指導に行きましたが、驚くべきことに正座ができない子がいます。生活環境でしょうか、椅子での生活、汚い話、トイレもそうですけれども、座る習慣がなく、足首が硬くて正座ができなくて、体育座りしている生徒もいます。

また紐、帯をうまく結べない中学生がいます。ボタンとかファスナーとかでの生活様式の違いがあるかと思うんですが、いわゆる帯を締める、紐を締めるというのは女性が着物を着る、着付けをする、日本の文化です。中学生であっても紐が結べない、うまく結べない生徒さんがいるということは本当に驚きです。

そして授業の中で、まず自分の身を守らなきゃいけない受け身を教えるに当たって、仰向けに寝て、頭を打ってはいけないから、じゃ帯の結び目、おへそをのぞき込みなさいというところにおいて、頭が持ち上がらない、筋力が弱い。幼児期に転んで起きるというような遊びの中での生活がない、そんなところもあろうかと思うんです。

しばらく前に幼稚園で転倒時怪我予防教室という形で、父親参観のときに幼稚園の体育館に畳を運び込み、柔道の投げ技を披露したり、親子で受け身の練習、受け身の真似事をしてもらいました。小さい子供たちというのは体も柔らかくて丸くなります。何とかできています。中学生においてでは、もう本当に遅過ぎると思います。でもその幼稚園で聞いたところによると、子供を転ばせない保護者がいると、びっくりしました。幼児期、立ち上がって歩き始めます。歩き始めに転びそうになると、母親が抱きかかえてしまう。転び方を知らずに幼稚園に入ってくる。それも驚きです。その中で今どうしても私たちの時代と違って、遊ぶ場所がない。外で遊ぶと危険だということで、外で遊ばせない親たちがいます。やっぱりスポーツというのは、ルールがあってやることです。

やっぱり柔道というのは、私も柔道によって育てていただきましたが、武道の中で柔道ほど安全ものはないと思っています。ほかの武道は、剣道にしても、空手にしても、相撲道、すべて離れてやります。柔道はお互い組み合ってから始まります。ですから、日ごろの稽古においては、組んだ途端、「あっ、きょうおれ元気がないな」「どこか悪いんじゃないか」ということも、日ごろの稽古でわかるようなときがあります。試合においては、私

の場合は組んだ瞬間、「わっ強いな」ということがわかりました。

やっぱり幼い時期にスポーツに携わる。柔道はすばらしいものだと思います。柔道に限らず、機械体操、マット運動、もしくはサッカーでもバレーボールでもいいと思います。地域総合型ということで、スポーツクラブですね、そんな形ができればと思います。浜北区においても、小学校の体育館を利用して地域総合型スポーツクラブという形では活動しているんですが、なかなか指導者もいなく、単一種目に限られてしまっています。その中でもやっぱり小学生の高学年が多くなっています。もう少し幼児期から運動、スポーツに関われるような状態をお願いしたいと思います。以上でございます。

<発言者6>

発言者6と申します。よろしく申し上げます。

株式会社PEERという会社をやっています。ガンや、見た目がちょっと変わってしまうような疾患、皆さんちょっと想像がつきにくいと思うんですけども、髪の毛が抜けていったり、例えばあごの骨にガンが転移したときに、この辺をぼんと取ってしまうような手術をすると、あごがなくなるというようなことがあるんですけども、そういったときに、皆さん悪気はなくても、髪の毛がなくて、この辺がちょっと欠損している方が向こうから来たら、2回見ちゃいますよね。それは人間の心理だと思うんですけども、そうすると皆さんは悪気ないですけど、御本人はやっぱり気にしますし、だんだん、だんだん外に出にくくなります。そうしたことができるだけないように、見た目はできるだけそのままにして、病気とともに生きていく方、病気を治療している間の方、いろんな方が今までの生活が続けていけるようなお手伝いをするような会社をやっています。

きょう私、先日内閣府で女性のチャレンジ賞という賞をいただいたときに、知事のお部屋に報告に伺ったんですけども、そのことを知事が覚えていてくださって、私はとてもきょううれしかったです。ありがとうございました。

この仕事を10年ほどやっているんですけども、一番最初のきっかけが、25歳で看護学校に入ったんですけども、今まで普通の一般企業にいたものですから、医療の世界というのはものすごく私にとっては異質な世界で、いろいろ学びが多くて、2年生になったときに実習に行ったら、患者さんが買おうと思ったものがなかなか買いにくいであるとか、例えばガンの患者さんを受け持ちさせてもらったときは、「カツラ買ってね」と言うんですけども、どこで買っていいかわからないとか、髪の毛が抜けていく段階で、なかなか外

にも出られないんだけど、売店に行くと真夏なのにウールの帽子しかないとか、世の中には物がいっぱいあふれているんですけども、一時的にいつもの生活ができなくなった瞬間に、何で世の中の物流というのは不親切なんだろうと思ったところが、今の仕事を立ち上げるきっかけになっています。

きょうは県の方と県知事がいらっしゃるので、何を訴えようかと思って、たくさんあるんですけども、その中から大きく2つ事業を通じて御提言をさせていただければと思います。

まず1つは血液内科の様子についてです。血液内科というのは、白血病患者さんや、血液のガンの患者さんが入院しているところなんですけれども、これがなかなか難しいところで、私がいるところが、皆さん御存じですか、きらりタウンなんですけれども、きらりは浜松医大のすぐ近くなので、医大の血液内科に入院されている患者さんから、「ちょっと帽子を持ってきて」なんていうお声掛けをいただいて、はいはいと私たちお店に置いてある綿の帽子を50枚ぐらいひょいと持って、病室にお伺いするんですね。

そうすると皆さんいろんな人が、その呼んでくれた方じゃない方が、どんどん、どんどんやってきて、皆さんで廊下でわいわいとお試着をしたりしながら話をして、2時間ぐらいそこで拘束されて、いろんな話を聞かせていただくようなことがちょいちょいあるんですけども、その中で皆さん、ここから出られないということをおっしゃるんです。確かに血液内科というのは感染が恐ろしいので、病棟や病室がある程度制限されて、外に出ることができないので、まず売店が1階とか地下にあるんですけども、そこまで行けないんですね。でも売店の方は当然ですけども、来てくださらないものですから、お茶1つ買いに行けないんです。

近くに入院していれば御家族が来てくださるんですけど、静岡で静岡の県立がんセンターとそこの浜松医大でしかできない治療があるものですから、病棟が空いてないと県の東部の方がここに入院されている方が結構いらっしゃって、御年齢も血液内科は比較的年齢の高い方が多いものですから、70代の方が例えば入院されていると、御主人とか奥さんも70代なんですよね。その方が東の方からJRに乗ってバスに乗ってくるのはなかなか大変で、1週間に1回ぐらいしか来れないよなんていうお話も聞きます。

病棟の整備というのは非常に難しいと思うんですけども、何とかそういった工夫ができるといいなと、いつも思います。売店をぜひ、私は出張売店でもいいと思うんですけども、もう少し血液内科や、ガンで長く入院されている方たちの日常が豊かになるような

サービスというのをひとつファルマバレー構想で何とかしていただけないかなというふう  
に思います。大きな機械を開発することはお金になるし、ここのケースを生かすことにも  
なると思うんですけども、それを使って幸せになるはずである患者さんや医療関係者、  
人そのものをもう少し幸せになるような仕組みにもぜひ目を向けていただきたいなと思  
います。

病は罰ではないので、そこに閉じ込められる必要は、本来治療上オッケーだったらない  
はずなんですけれども、なかなか私も看護師なので、病院の中を変えることの難しさとい  
うのは非常にわかるんですけども、もう少し柔軟な対応ができるような何か仕組みにな  
るといいなと思います。

もう1つは、今静岡県から緊急雇用の件で障害福祉課さんと障害がある人が働く場、い  
わゆる作業所とか授産所と言われるところにつくっている物の販路開拓であるとか、ブラ  
ンディングのお手伝いをさせてもらう事業を今年度1年間させていただいています。やり  
ながらいろんな作業所さんにお話に向うと、やはりものすごく苦勞されているんですけ  
れども、努力されているんですけれども、きょう知事が恐らく午前中に行かれたジュースを  
つくっているところも、ものすごい一生懸命頑張っていっちゃって、理事長さんも本当  
に一生懸命なんですけれども、やはり販路開拓、ブランディング、消費者が欲しいものを  
どのぐらいのサイズをお届けするのかということ、そんなに長けているわけでは恐らく  
ないと私は個人的には思っています。一般の企業でもマーケットと言われる人たちは、本  
当に感性を立てて、いろんなところに売り込みに行ったり、そこで欲しいものを一生懸命  
発掘して、そこに合わせた形で導入するというところで非常に努力をしています。

皆さんは障害福祉に関わっていっちゃるほど、ものすごくいい方で、何か裏があるん  
じゃないかと思うぐらいいい方で、どきどきするんですけども、お話をしていると。で  
も、私たち一般企業は仕事をすればいいですけど、皆さんは障害がある人たちがより豊か  
にどうこれから生きていくのかというところでも注意をしなくてはいけないので、2  
倍働かなきゃいけないんですけども、人の時間は24時間で同じだけしかないのですか  
ら、そのマーケットの役割をもうちょっと支援できるような仕組みができていくと、今  
後もっと作業所の商品がたくさんの方に愛されるようになっていくのではないかなと思っ  
ています。

今取り組んでいることは、基本的に地域に住む人で、少し何らかな不自由を、一時的であ  
ったり、恒久的であったりとかする人たちが、そのサービスを利用しながら、少しでもそ

の人らしい役割をずっと続けて地域で暮らし続けられるような、そんな豊かな地域づくりというのを目指して仕事をさせていただいています。

生意気を申し上げて非常に恐縮なんですけれども、ぜひその2点を何とか御検討いただければと思います。よろしく申し上げます。ありがとうございます。

#### <県知事>

今、発言者6さんの方から、何か裏があるんじゃないかと思うぐらいいい人がいるとおっしゃいましたけれども、きょう今のお2人のお話は全く裏がないことがわかっているいい人2人のお話をお聞きしたという感じでございます。

発言者5さんは柔道七段ということでございまして、武道がこれから必修の科目になったということで、先生の役割はまた大きくなるというふうに思いますが、やはりこういう浜北に柔道の達人がいらっしゃるということは、しかもスポーツ少年団というものを育ててこられたというのは、本当に幸運であったというふうに思います。それでまた後継者も引き継がれているように、恐らくこういう武道の達人に会うと、それに感化されて僕も私も発言者5さんのようになりたいと思っている少年少女がいるに違いないというふうに思いました。

そうした中で、今この武道というのはやっぱり道でございますので、勝つことではなくて道を教えるということなのだと思います。稽古するという姿勢を貫く、そしてきちっと型を覚える。そのことを継続することによって勝敗もついてくるという基本的な考え方を徹底的にたたき込むということによって人間として成長するということを御自身みずから証されて、それを子供たちに継承させていこうというお考えだと思いますので。

そしてまた剣道と柔道ですと、剣道お金がかかりますよね。何しろ剣道着って高いでしょう。お古で使えるといたって汗臭いんじゃないですか。(笑) ですから剣道というのはすばらしい武道だと思いますけれども、それと比べると柔道の方がお金はかからないということで、そして今おっしゃったようなお互いに体を触れてやるので、相手への気づかいというものがおのずと生まれるということなので、相撲というのがもっと簡単なように思っただけですね。子供のときは最初から柔道しないでしょう。最初は相撲やっていて、ちょっと柔道を学ぶと、相当技がマスターできるというふうに思うんですが、相撲もやっぱり相撲道というのがあって、私はこれも捨てたものじゃないというふうに思っていたので、勝手なことを申し上げました。

だけど、基本的に地域総合型のスポーツクラブですか、こうしたものはぜひ浜北区長がいらっしゃるので、浜北が中心になって、いろんなことを子供のときからやって、転び方も覚えるし、体に身についたことはずっと生涯の財産になりますので、そうした総合型のものがどこかでできればいいですね。ここは人口もふえているし、税収もふえているんじゃないでしょうか。場合によっては浜松の中で自立するぐらいでやっていただいて、ともかく子供のために一生懸命やろうということで、そうした指導者もいらっしゃるので、これをぜひやっていただきたいというふうに思う次第でございます。

そして発言者6さんは内閣府女性チャレンジ賞というのをとられたんですよ。本当に心だてがお優しいといえますか、白血病の方に接して、この方のヘア、かつらを格好よく作って、そして堂々と社会の中で生活できるようにしてあげようというところから始まっていらっしゃるわけですね。先ほど売店のことをおっしゃったので、私はきょう初めてこれを聞きましたので、早速持ち帰って、今うちの衆がしっかりノートしているので、どういふふうに対応できるのか考えさせてください。ガンが一番日本人の死因の中で多いんですね。ですからガンで抗がん剤を飲んで顔面がいろいろぐあいが悪くなった、あるいは手術をして少し恥ずかしいというふうな思いになった方たちを助けようということなので、しかもガンについては最高の治療法を静岡県は持っているわけです。

同時に、きょうはこっちへ来ていませんけれども、前知事公室長は10年間、長泉のがんセンターのよろず相談というのをやっておられたんですよ。患者さんももちろん心配ですけども、自分の命が。しかし家族も、それに劣らず心配ですよ。そのすべての相談を全部快く引き受けてくれた人がいたんです。その結果、朝日がん何とか大賞というのをくださったんです。それは院長先生のところに賞がいったんですけども、実際はうちの職員の中にそういう人がいますので、前知事公室長、女性の方です。ですからそれを伝えまして、場合によっては発言者6さんに直接会っていただいて、この血液内科で起こっているようなことについて、患者さんの立場に立って何ができるかということを検討いたします。

それから授産所、きょう確かにそうなんです、KuRuMiXでしたかね、そこに行きまして、ミカンで形がよくないものをジュースにして、それを「都田」といいます。飲みましたか。260円。福島産のやつは360円ですよ。100円安いです。何で260円ですかと言ったら、先ほど家康公の楽市のことをおっしゃいましたけれども、家康が開いた徳川時代は260年間平和が続いていたから、だから260円にすると。すごい考え方で260円にすると。

それからもう1つ「無塩」というこれはトマトをジュースにしたものなんです。トマ

トジュースはどろっとして、ちょっと塩を入れているんですね。一切入れないんですよ。だからすきっとしているんです。トマトを食べたという感じで、ビタミンAとかも。「都田」の方もミカンですから本当にすきっとしてビタミンCがいっぱいという感じで260円です。

これは授産所の人たちがつくったものを使わないことには彼らを励ますことができます。だから1人1品運動をしたいと。きょうは私ちょっと今持っていませんけれども、たしかこのマッチも授産所で作ったものじゃないかと思って、さっき見ていたんですけれども、同じようなものを単純作業で作られると、それは得意なんですね。それから私日ごろバッグを持っているんですが、そのバッグも3代目ですけれども、授産所で作っていただいたものです。それをみんな使うということを通して、今給料も低いんですけれども、授産所で働いている方たちは。

それからまた障害のある方たちを雇用しなくちゃいけません。これは法律で決まっています、全体の2%はそういう障害のある方を雇いなさいとなっているんです。ことしの4月から2%になって、これまでは1.8%だったんですが、まだ1.8%にも達していないんですね。しかしそういう障害のある人にふさわしい仕事というのもあるんですよ。それを一生懸命やっている方たちがいらっしゃるんですよ。先ほどのKuRuMiXもそうです。そうすると、やっぱりそういうものをどこに出したらいいかということで、やっぱり全員で知恵を絞って使う、買う、できればそれを優先して、これも品質的にはしっかり保証されたものでつくられていますので、励ますという形で、いろいろな意味での地産地消ですね。

これもそうでしょう。遠州木綿も我々が使う。食材についてもこちらのものがたくさんあるので、十分に春夏秋冬食べるものがあるのでそれを使う。それから建物も県産材を使うというようにして、衣食住のそういう基本的な生活に関わるものは、土地のものでつくられているし、使えばいい。そして品質がすべて高いでしょう。天竜材にしてもそうです。それから遠州木綿にしてもそうです。食材にしても、名人がつくっていますから、発言者3さんのような若い人たちもいるし、今この浜北を含めた浜松の北遠地域に相当若い青年たちが参入してきていますよ。

だから今耕作地が足りないというぐらいのところまできているわけです。きょう会ったある青年は5アールから始めて、今17ヘクタールまできて、50ヘクタールまでしたいと言った人がいましたね。それからサツマイモについては、ウナギ芋をつくった人がいたでしょう。サツマイモというのは、サツマイモだけだと薩摩に負けますよね、薩摩芋というぐらいですから。ところがそこにウナギの骨を砕いて肥やしにしたわけです。そうすると栄

養がいいように何となく思えるじゃないですか。そのウナギ芋を加工品にして、プリンにしたり、おせんべいにしたんですよ。そうすると今度はウナギを励まさないといけないでしょう、ウナギ芋というぐらいですから。だからウナギが採れなくなっているとウナギのことに関心が向きます。

ですから、そのようにいろんな形で農林水産物というものを我々が組み合わせると新しいものが出てくるわけです。そうした中で障害を持っている人たちが単純作業でできる、そういう工程があります。そこに入っていただくのがいい。もちろんモダンタイムズみたいにネジを回すとか、それだときついかもしれない。しかしながら大地に関わるものをいじるということであれば、さっき発言者3さんがおっしゃったように、地球に触れるということがあるので、何かエネルギーとか、何かもらうんですね。そういう意味でその方の健康にとってもいいし、結果的には産物がみんなの口に入るので健康にもいいということになって、みんなが使うというような、そういう文化をつくり上げていきたい。それは一気にできないので、どこかでやればいい。そうです、ここですね。いつやるんですか。今でしょう。(笑)

そういうわけで、本当に6人の方々のお話を聞きまして、大したお話だったなということとで感心いたしました。どうも本当に勉強させていただきましてありがとうございました。

#### <県知事>

何をすべきかということについても、私たち行政の者も、また浜北区長も含め、地域の人たちも、そしてきょうは県議会議員の先生も来ておられるので、こういう県会を通して県としてできることを力を合わせて、きょう出てきたさまざまな課題につきまして、課題は解決するためにあるということなので、その課題の解決に向けて力を合わせて、1つでも2つでも解決をして、皆様方に喜んでいただければというふうに思っております。きょうは本当にありがとうございました。